

脳卒中片麻痺患者のペグ操作能力と ADL における上肢実用度

【背景】

脳卒中片麻痺患者の上肢機能訓練は、電気刺激療法、CI 療法、ペグやお手玉などを使用した訓練など、さまざまである。作業療法士としては、日々の上肢機能訓練の中で、どの程度のスキルを獲得すれば実際の ADL 場面で実用できるのかを正確に判断し、実際の ADL で上肢を使用していくように導いていくことは重要であると思われる。

今回、治療場面で用いることの多いペグを用い、書字・箸操作の実用度を判定する指標について検討する。

【目的】

ペグ操作課題において、どの程度のスキルがあれば書字・箸動作で上肢を実用できるのかを調べること

【対象】

利き手の麻痺を呈した脳血管障害患者 30 名

除外基準：坐位耐久性が 20 分未満のもの

重度の失語・認知症により検査が行えないもの

【方法】

研究デザイン：横断的研究

評価項目：年齢、性別、麻痺側、BRS、STEF、ペグ 10 本を入れる所要時間（ペグ入れ時間）、ペグを 10 本反転させる所要時間（ペグ反転時間）、箸と書字に関する Motor Activity Log (MAL) (参考)

統計学的手法：

- ① ペグ入れ時間と STEF,ペグ反転時間と STEF の相関をみる (pearson)
- ② MAL4 点以上と MAL3.5 以下の 2 群にわけ、ペグ入れ時間とペグ反転時間を 2 群間で比較する (Mann-Whitney U 検定)
- ③ ペグ入れ時間、ペグ反転時間から、書字、箸の実用度を判定するための判別精度を検討する (感度・特異度・陽性的中率・陰性的中率)

【倫理的配慮】

当院倫理委員会の承認を受ける

【予測される結果】

どの程度のペグ操作能力があれば書字・箸を実用できるのか、実用度を判別する際の参考値が明らかになる

【発表予定学会】

平成 28 年 WFOT

【参考文献】

- 1) David M.Morris, Edward Taub: Constraint-Induced Therapy Approach to Restoring Function After Neurological Injury. Top Stroke Rehabil 8(3):16-30 2001
- 2) Gitendra Uswatte, Edward Taub, et al: Reliability and Validity of the Upper-Extremity Motor Activity Log-14 for Measureing Real-World Arm Use. Stroke 36:2493-2496, 2005
- 3) 笠島悠子, 藤原俊之 ほか: 慢性期片麻痺患者の上肢機能に対する随意運動介助型電気刺激と手関節固定装具併用療法の試み. リハビリテーション医学別冊 43(6): 353-357,2006